

「胃 形態とその機能」第2版

京都府立医科大学教授・公衆衛生学 川井 啓市 編集
 大阪府済生会野江病院消化器科医長 井口 秀人 編集協力
 京都第一赤十字病院胃腸科副部長 清水 誠治

元札幌医科大学長・名誉教授
 国立がんセンター顧問

和田 武雄

久しぶりに川井啓市教授の訃告に接する思いを深めながら、その編集に成る「胃 形態とその機能」(医学書院)の改訂第2版を、二日二晩かけて通読した。

編者としての言葉にもあるが、これは改訂第2版というよりは、内容を一新した点で今日の“胃学”の新生面を集約した新刊書である。初版以後20年間の医学の各分野の発展を織り込んだ構成は、全く新しい。書評を承わった筆者も30年前に、組織形態と機能との関わりに焦点をおいて、消化管の生理・生化学と病態変化の一書をまとめかけたことがある。意図が腰砕けに終わった理由は、組み立てた構想と研究知見個々との間に整合性が得られなかったことが第一だった。このころ、間もなく川井教授は増田正典教授の下から公衆衛生学を担当して独立されたが、意表をつく人事を、親しかった増田教授と話し合ったことを忘れない。“今に内科学の先を行く公衆衛生学の時代が来るよ”，これが彼の

頑とした意見だった。疾患を無症候の時期に捉える時代、四半世紀も前にそれを先取りしていた畏友を、本書をひもときながら思い出した。そのころの川井教授について忘れられないもう1つは、病理学の藤田哲也教授の協力下に進められた、胃粘膜細胞の動態についての研究である。一方に地域医療を口にしなが、川井教授の言うマクロレベルの形態をミクロレベルに追究する学問的深化がうかがえた。そして本書の初版が上梓をみた。学問の地平を変えたことがライフワークの方向性を確と定める契機になった。筆者はそのようなことを考えていた。

さて本書は、着想を新たに“胃・十二指腸の基本構造”から始められ、各種細胞の発生学的・動的観察知見を系統的に解説すると共に、機能面に関わる血管構築・神経支配・免疫機構などの項目が新たにされていて理解しやすい。分泌機能は、成分別に細胞内外の機構と共に詳細かつ簡潔に説かれている。

新しい注目点を、“ストレスと粘膜防御機構”と“*Helicobacter pylori*”の2章にとりまとめて特徴づけたが、慧眼である。それぞれの史実と先端知見を述べて、更に今後を展望した筆致には、読後に研究意欲がそえられる。むしろ臨床面への関連を念頭にした意図が疾患論として総括されているが、編者腐心のくだりであろう。

分担執筆者の選択に成功して、詳細・緻密な解説でありながら要を得た図表・文献によく調和がみられ、随所にみられる注釈の囲みが、またよい。各章ごとに要約された編集者の言葉が、本来の内容理解を助けるにとどまらず、全体を系統立てている。序の言葉に“未だ問題を残しているし、今後お互いの研究目的の歩み寄りを…”とあるが、現時点において1つの完成をみた質の高い書物と称されよう。

● B5 頁368 図148 写真76
 原色図45 1994 定価21,630円
 (税込) 千450

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)